

全日本少年北海道予選

2012年6月30日～7月1日

会場：苫小牧市緑ヶ丘公園サッカー場

【報告者】HFAテクニカルスタディグループ

優勝：SSS札幌サッカースクール

準優勝：FC DATE

3位：コンサドーレ札幌U-12

旭川ネイバースFC



北海道から世界へ羽ばたく

今年も各ブロックの予選を勝ち抜いて、16チームが苫小牧緑ヶ丘公園サッカー場に集まった。今回は、2日間にわたる戦いのうち最終日の準決勝2試合と決勝を通して、北海道の個の育成を観点に分析を行った。

1. 大会の概要

道内15地区予選から5ブロック予選を勝ち抜いたチームによる大会で、今回は、札幌4、道央・道南・道東・道北各3の16チームが参加した。

8人制による大会で、試合時間は40分(20分ハーフ)。各チームとも1日に2試合をこなさなければならぬ。

今大会で優勝したチームは7月30日から静岡県で行われる全国大会に出場する。

2. 守備

(1) チャレンジ&カバー

ポジションと役割を明確にして、戦うチームが多かった。チームとして、チャレンジ&カバーを徹底して戦おうとトライしていたチームも多くいた。中でも優勝を勝ち取ったSSSにおいては、集中を切らすことなく、ファーストディフェンダーの決定と的確なカバーリングのポ

ジショニングが取れていた。

一方で、ファーストディフェンダーの決定の判断やコンタクトスキルの甘さ、相手FWとの距離間に課題があり、相手FWを自由にさせてしまう場面が失点につながることもあった。この年代の守備の未完成的な部分が課題としてあった。

北海道の課題として、このチャレンジ&カバーの徹底したスキル獲得の指導を継続していくことが重要と考える。さらに質も高く取り組むべきである。全道大会に駒を進める全てのチームが徹底できてこそ、攻撃面のテクニカルな部分が発揮され、技術の向上が図られるのではないかと思う。

(2) コンタクトスキル

U-12年代の大会においても、体格やスピード&パワーなどのフィジカル面の差を感じる場面はあり、その面は解決はできないがコンタクトスキルによ

REGULATION



スケジュール

1日目：1・2回戦

2日目：準決勝・決勝

試合時間：40分(20-10-20)

り、ボールを奪う技術は重要である。

大会中、一人の粘り強い守備と連動して二人目が関わる場面も多く見られたが、一人目の守備のコンタクトが甘く、相手に体を預けられて突破されたり、二人目の役割(チャレンジ&カバー)がはっきりせず、守備の二人が置き去りになる場面もあった。

日頃のトレーニングで、コンタクトスキルの向上は欠かせないと考える。現在、各チームで取り組まれている。積極的な守備(“アプローチ!”“ボールを奪いに行こう!”)をさらに質の高い守備として、コンタクトスキルにて、ボールを奪うことを徹底すべきと考える。体をあてて相手の自由を制限し、ボールを奪う“守備のテクニック”が日頃のトレーニングで取り組むことを望む。

(3)ヘディングの競り合い

8人制の採用により、GKより足下でつなく戦術やDFラインからのロングフィードよりもDFラインから一度GKに戻して組み立

てる戦術が多くなってきた。それに伴い、ロングボールやルーズボールをヘディングで跳ね返すことやヘディングで前線へパスをすることが少なくなり、技術を発揮する場面が少なくなった。

ヘディングでの競り合いで手を出してしまったり、頭に当てるだけで精一杯だったり、跳ね返すだけで、ボールを失うケースも見られた。

ヘディングの競り合い後、セカンドボールを拾う他のプレイヤーの読みのポジションニングのみならず、ヘディングをするプレイヤーのパスの技術も重要となる。

ゲーム中、何度となくプレーの機会があるのが、スローイングである。リスタート時に正しいポジションニングを取り、まわりを見てパスを出すことが求められる技術であるから、ボールを失わないためにも日頃から欠かせないトレーニングの一つである。

(4)守備の連動

DFラインを上げて全体的にコンパクトにバランスを保ち、高い位置からボールを奪うなど積極的な守備で戦う場面が大会を通じて見られた。さらに、中盤からパスやドリブルで崩され

SEMIFINAL



FOR
YOUR
DREAM

SEMIFINAL.



た時にシュートを打たれ、GKのファインセーブも多く見られた。

しかし、守備の連動という意味で、GKを含めた守備と考えた時に、シュートを打たれる危機感を共有し、GKやDF陣による的確なコーチングにより“シュートを打たせない”という守備の場面が少なかったように感じた。

“ボールを奪う”“シュートを打たせない”が点を取られない、最善の方法である。

普段のトレーニングで、2対2・3対3等のミニゲームでも、意識した取り組みが大切であると考える。

3. 攻撃

(1)テクニク

高い位置でボールをもらい、前を向いて、中からも外からもゴールに向かい、シュートを撃つシーンが多く見られた。特に、バイタルエリアのしかけでは、相手を見て判断したプレー、キックフェイントやター

ン、切り返しなど工夫をし、ゴールを目指していた選手もいた。

一方で、自分自身のスピードについて行けなかったり、相手を見ずにしかけて、ボールを失う場面も多く見られた。

コントロールはスピードを落としてでも、攻撃の選択肢が持てるよう、視野を確保し、ボールを動かすことをトレーニングで振り返ってみることが大切である。また、良い準備として、前を向ける準備やシュートを打てる準備、さらには決定的なパスを出せる準備等、ボールが動く中で、良いポジションングも意識するよう、指導では声をかけていくべきであろう。

(2)コンビネーションと関わり

1トップや2トップにボールを預けて、サポートと連動し、崩してゴールを目指す攻撃や幅を持ってボールを動かし、サイドからの崩しで数的優位をつくり、ゴールを目指す攻撃などチーム毎、選手が戦術を理解して戦っている場面が多く見られ



た。特に上位チームによる個のしかけや関わりが多く、攻撃のリズムとなっていた。ただ、バイタルエリアでのボールホルダーを追い越すプレーやワンツーパスによる崩しは、戦術の選択として、もう少し見られても良かったと感じた。

しかし、当然のことながら、相手のハイプレシャーで攻撃の起点がつかれなかったり、高い位置にボールが入ってもサポートが間に合わず、攻撃に厚みなく、ボールを失う場面など苦しい戦いを繰り返す場面もあった。

攻撃の幅や厚みを攻守の切り替えで、無理なくゴールを目指せるよう、正しいサポートのポジショニングや関わる選手の数などは、日頃のトレーニングで幅と厚みを設定した中で修正し、どんな戦い方になっても臨機応変、関われるよう習慣づけたい。

(3)切り替え

守備から攻撃の切り替えでは、切り替えの意識が高く、素早い対応(正しいポジショニング)が多かった。さらに、ポジション

修正なども素早くできていた場面もあった。

攻撃から守備への切り替えでは、ファーストDFの決定が速く、素早くポジショニングをとる意識が高いチームが多かった。ただ、前述にもあるように、ファーストDFの質の部分で差があり、そこで崩されることもしばしばあった。

また、守備の時間が長かったり、パスミスやパス選択を誤り、継続して守備にまわる機会が多くなってしまった場面も見られた。また、攻撃に転じたが守備に関わった人数が多く、攻撃への起点へのサポートが遠く、厚みのある攻撃に至らなかった場面もあった。

切り替えの意識は高い部分が徹底されているので、質の部分で個のスキル向上が課題である。正しいポジショニングやボールの位置によるポジション修正、さらにはファーストDFのコンタクトスキルなど、トレーニングでの改善が求められる。

4. GK

(1)成果

FINAL ROUND



- 攻撃において、GKのかかわりが多く見られた。ミスもあるが、積極的にチャレンジしていた。その中でも、キックの質と距離が上がってきた。
- 準決勝・決勝の3試合のディストリビューションの成功率は39パーセント。ゴールキックをサイドの高い位置にパスするなど、攻撃の第一歩としての意識が見られ、FPの効果的に関わりも見られた。
- ボール保持者の状況をよく観ており、シュートに対しての準備は良い。単純なテクニックミスによる失点が少ない。
- GKのウォーミングアップに、すべてのチームがコーチがついて指導されていた。

(2)課題

- 効果的なディストリビューションを行うためにスローイングのテクニックも向上させる。
- GKからのキックではなく、攻撃の第一歩としていかに得点チャンスに結び付けていくか、というパスの意識を持って味方やスペースに正確に配球する。チームとして、主導権を持ちながら攻めるという意識統一。
- 実際にボールにプレーする前の状況において、把握の質を上げる。ボールと自分の関係だけではなく、相手

や味方の状況も把握し、予測をもつ。

- クロスや、スルーパスなどのブレイクアウェイの状況において積極性がほしい。そのためにも、状況の把握や予測が必要である。
- 守備において、GKとFPの連携をさらに多くする。そのためには、チーム全体の守備のトレーニングの中で、GKにも積極的に役割を与えていく必要がある。守備の優先順位なく、その原理原則を理解していき、なぜ決断して大きな声で伝えなければならないのか」「なぜボールを空けてリスクを負ってはいけないのか」「なぜゴールキーパーが必要なのか」といった今後のGKとしての資質にかかわると感じる。

6. まとめ

準決勝、決勝を通して、この年代の育成では個人戦術の徹底が必要である。常に攻守に関わる選手を育成するためにも、個々の必要スキルを磨くことが重要である。8人制サッカーで、ボールを失うような場面も多く見られた。組織的なサッカーを展開するよりも、個々の判断力を高めることが重要ではないかと感じた。

ゴールを目指す個人戦術、顔を上げて攻撃の選択肢を持ち、正確にプレーする選手の育成が重要と感じた。また守備においても、GKを含めシュートを打たれる危機感も共有し、共感する場面が少なく、攻守の切り替え時に約束事として、子どもに徹底を図るべきだと感じた。また、ボディコンタクトでボールを奪うことや体格差ゆえに良い距離感で対応するなどの守備の個人スキルも獲得も欠かすことのできないものだと感じた。

最後に、このレポートを作成するにあたって協力いただいた方々に感謝申し上げます。お礼のことばといたします。

PICTURE



主催者コメント

道4種委員長：神谷 敦

この大会が8人制の大会として実施されて2年目を迎えます。一人一人のボールに触れる機会が増加することにより、判断の速さや正確性、プレーの質の向上を目指しています。また、ゴール前での攻防を多く経験させることにより、攻守における1対1に強い選手を小学生年代から育成していくことも導入の大きなねらいです。今回代表になったSSSには、今まで積み上げてきた個の技能をさらに磨き、十分にその力を発揮して全国大会で活躍してもらいたいと思っています。



PLAYERS
FIRST

TSGメンバー

- 石田 憲一
(チーフ・苫小牧東中学校)
- 菅田 浩之
(ゲーム分析・伊達中学校)
- 本多 孝至
(GK分析・札幌創成高校)
- 長田 拓生
(ゲーム分析・厚真サッカー少年団)

- 西村 祐紀
(ゲーム分析・松前サッカー少年団)

参加チーム

- SSS札幌サッカースクール (札幌)
- コンサドーレ札幌U-12 (札幌)
- アンフィニMAKI FC U-12 (札幌)
- 富丘サッカースポーツ少年団 (札幌)
- 恵み野サッカースポーツ少年団 (道央)
- 小樽中央FC (道央)
- FC大曲ジュニア (道央)
- エスピーダ旭川 (道北)
- 旭川ネイバースFC (道北)
- 枝幸ジュニアサッカークラブ (道北)
- 釧路SSM (道東)
- 札南WEED (道東)
- 朝陽FC (道東)
- FC DATE少年団 (道南)
- FC白老ベアーズ (道南)
- フロンティアトルナーレFC U-12 (道南)



財団法人 北海道サッカー協会
Hokkaido Football Association